

小学校における俳句創作指導の試み

朝岡剛

はじめに

今年度から、小学校においては、新しい学習指導要領が完全実施されており、内容の新しい教科書での学習が始まっている。国語科の内容は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で構成されている。これは、学習指導要領の改訂の柱「伝統や文化に関する教育の充実」を受けてのことである。

合わせて、全教科における「言語活動の充実」も今回の改訂の大きな柱となっている。

本稿では、このような背景を受けて、小学校段階における俳句づくり（創作）指導の実際について、具体例をもとに考察するものである。

一 学習指導要領における位置づけ（注一）

新しい指導要領において、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」という項目がつけられ、小学校一年生から、「昔話や神話・伝承」（一・二年）「優しい文語調の短歌や俳句」

（三・四年）「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章」（五・六年）が具体的に言語活動の題材として明示されている。

また、第五学年及び第六学年の「書くこと」の言語活動例として、具体的に俳句の創作があげられている。それを受けて、今年度からの教科書の実際は、次のようになっていく。（注二）

三年・・・単元「日本語のひびきにふれる 俳句に親しむ」

小学生・小林一茶・与謝蕪村・高野素十・山口誓子・松尾芭蕉・正岡子規・中村汀女・炭太祇の俳句を季節ごとに紹介し、音読を通して言葉のリズムを感じさせることをねらいとしている。最後に、児童に、「夏」を題材とした俳句づくりを呼びかけている。

四年・・・単元「日本語のひびきにふれる 短歌の世界」

柿本人麻呂・藤原敏行・藤原定家・良寛・与謝野晶子・石川啄木の短歌を年代順に紹介し、時代を越えて響く作者の心を味わうことをねらいとしている。最後に、児童に「心にしみてうれしかりけり」という言い方を使って、短歌づくりをよびかけている。

いずれも、学習指導要領に基づき、三年生で俳句、四年生で短歌の創作を位置づけている。

従来の学習指導要領では、高学年(五・六年)で俳句や短歌を取り上げていたことと比べ、次の二点で違いが見られる。

・伝統的な言語文化全体における俳句や短歌の位置付けが明確になっている。

・音読や鑑賞に加え、俳句や短歌の創作にまで言語活動が広がっている。

二 「俳句づくり」にいたるまで

(一) 今までの取り組み

今までは、地域の標語募集や山形県少年少女俳句大会(尾沢市主催)に、何人かの作品を応募する程度で、積極的な取り組みはしてこなかった。どのような俳句が良いのか、私自身明確なものがなかったからである。

(二) 先進校に学ぶ

そこで、夏休み中の研修として、第七十二回国語教育全国大会(日本国語教育学会主催 平成二十一年八月三日～四日 会場 日比谷公会堂 文京区立窪町小学校 筑波大学附属中学校)に参加させて頂いた。「俳句づくり」について、理論・実践両面から学ぶためである。(注三)

① 岡島昌幸実践に学ぶ(長野県長野市立徳間小学校)

長野は、俳句づくりの実践が以前から行われていたようである。岡島実践は、学校全体を巻き込んだ「全校俳句創作活動」

の手順や「俳句だより」「六年生と一年生の共同俳句創作」など、自然豊かな環境を題材に、日々児童の思いや考えを素直な言葉で俳句に表わすという特徴があった。岡島氏が、良い俳句として選定する基準は、次のようであった。

□ 説明的でなく、作った子の素直な感動や思いが感じられるもの

□ 目のつけどころ、場面の切り取りのうまさを感じられるもの

□ ことばの使い方が工夫されているもの

□ だれもが思わず「なるほど」と共感してくれそうなもの
私なりに整理してみると、□着眼点 □取材 □記述 推敲
□普遍性という評価基準になるのではないかと考えた。

② 句会を体験する

俳人でもあり、元筑波大学附属小学校の藤井國彦先生を講師に、実際に「句会」に参加し、その指導法について研修してきた。体験した句会の手順は、次の通りであった。

当日、私が提出した俳句は、以下の三句である。

○ 梅雨空に負けずに響く蝉の声

○ カプトエビ平野の早苗独占す

○ われ先と語るる子らや始業式

初めての句会体験で緊張の連続であったが、言葉の選び方や目のつけ所、「一句一章」や「二句一章」の考え方など、俳句のとらえ方について学ぶことの多い句会となった。句会の手順は、次のとおりである。

出句……予め作ってきた俳句三句を短冊に書いて提出する。
清記……みんなの句を三句ずつ清記する。
選句……みんなの句の中から三句ずつ選句する。
披講……選んだ句を、披講者が読み上げる。
点盛り……どの句が何人選ばれたのか確認する。
協議……結果について、みんなで話し合う。
講評……指導者の選句と講評を聞く。

三 「俳句づくり」の実際

小学校段階における俳句の創作活動は、岐阜県大垣市(注四)や愛媛県松山市(注五)など、松尾芭蕉や正岡子規ゆかりの地で熱心に取り組まれているようである。しかし、中島賢介が指摘しているように、俳句の指導は、「あくまでも音読と鑑賞が中心」(注六)であり、創作活動が、日常の国語教室において広がりをを見せているとは言い難いようである。私自身の実践を振り返っても、六年生の修学旅行で松島を旅した際に、一句作らせた程度である。

そこで、学校生活の様々な場面で、俳句作りを位置付けてみる試みを行ってみた。以下では、その概略について紹介する。

(一) 季節や体験したことを題材に俳句を詠む (五年生)

① 体験したことを題材に詠む

五月に田植えを体験した田んぼに、六月になり「カブトエビ」が泳いでいるとの連絡を受け、実際に見学に出向いた。広野地

区の水田にしか見られないカブトエビを題材に詠んだ作品が、以下のとおりである。

- カブトエビ 田んぼの中の ようせいだ
- カブトエビ 田植えが終わって やつてきた
- カブトエビ 田んぼで泳ぐ すいすいと
- カブトエビ 毎年くれば いいのにな

② 季節を題材として俳句を詠む (四年生)

図書委員会が募集した俳句コンテストに応募し、入選となった句である。

- 夏の草 風にゆられて ほんおどり
- 夏の夜 空を見あげて あまの河
- さそり座の 一等星は ルビーの目

③ 体験したことを「俳句劇」にしてみる (五年生)

秋に実施した金峰自然体験教室では、いかだ体験や初めてのテント泊、金峰山登山、野外炊飯、など児童にとって、心がゆさぶられる体験ばかりであった。そこで、体験毎のチームを四つ作り、劇で表したあと、模造紙に大きく俳句の作品を書き、一人一人が読み上げる「俳句劇」(筆者の造語)をつくり、学習発表会で、全校児童を前に発表してみた。いくつかの作品を紹介する。

- 秋の風 どこまで流す いかだ船 (いかだ体験)
- たすかった ぼくたち生きて 帰れたよ (いかだ体験)
- 火がつかず うちわばたばた 灰が飛ぶ (野外炊飯)

- 鶴岡の まちをどくせん 頂上で (金峰山登山)
- 真夜中に ねごとでいきなり 起こされる (テント泊)

俳句というより川柳に近いが、この俳句が劇のせりふや動きを補強する形になり、臨場感のある発表につながったと思われる。

(二) 標語や俳句のコンクールに出品してみる (四年生)

- ① 広野地区防犯協会主催 防犯標語 (七月) 入選作
 - あんぜんは 広野のたから まもること
 - たしかめよう 出かける前に 家のかぎ
 - かぎかける 犯罪防ぐ キーワード

② 第二十回山形県少年少女俳句大会 (七月) 尾花沢市主催

入選作

- 夏休み 公園中に セミひびく (二年女児)
- 海を見て 自分の気持ち うちあげる (四年女児)
- てんぼう台 のぼると海が ひかっている (三年男児)
- こまつはま オーロラみたいな 海の色 (四年女児)
- テスト中 プールではしゃぐ 一年生 (五年女児)

③ 「曾良」に向かつて一句」コンクール (十月) 酒田市教育委員会主催) 出品作品

- 水しぶき 応援している 顔見える (五年)
- たんぼみち めだかがいっぱい およいでる (一年)

- 田んぼさん サラサラサラサ おとなるね (二年)
- 真つ赤だね 夕焼け空は 秋の海 (三年)
- とびまわる ウミネコ見ると 目がまわる (四年)
- 初めての ラジオたいそう ねむたいな (五年)
- ねこの背に こうよりの葉 まいおちる (六年)

④ お金の標語 コンクール (十一月) 日本銀行山形支店主催) 出品作品 (五年児童)

- 貯金して 豊かな未来に つなげたい
- おかしいな 電話を手に取り 110番
- ほしいもの たくさんあるけど ひとつだけ

⑤ エネルギー川柳コンクール (十一月) 東北電力山形支店主催) 出品作品 (五年児童)

- いつまでも 地球のみどり 残したい
- そこまでは 自動車がまん 歩いてく
- ぼくたちが できることから 始めよう

(三) 物語文の学習のまとめに「俳句づくり」を位置付けてみる (五年)

物語文「わらぐつの中の神様」の読みの学習を終えた後、心に残る場面や思いを俳句で表してみた。児童の作品例は、次の通りである。

- わらぐつを 編んではみたが 不恰好
- いつまでも あの雪げたが 呼んでいる

- 大工さん わらぐつ前で 足をとめ
- わらぐつが 二人の仲を 近づけた

(四) 季語を入れて夏の俳句を詠もう(六年七月)

体験したことを中心にした俳句づくりに加えて、高学年では、「季語」を意識した俳句作りに挑戦させたいと考えた。以下は、六年実践のあらましである。

① 「季語」とは、何かを理解させる。(十五分)

社会科で「日本の歴史」を学習していることから、江戸時代の人々のくらしを表す資料として、安藤広重の「東海道五十三次」の中から、何枚かの作品を提示した。児童は、何でもある現在と違って、登場人物の様子や服装から、この頃の人々の生活が、正に季節に応じ、季節を感じながらのものであったことを漠然ととらえたようである。また、この頃は、月を基準とした暦だったために、現在より季節が早くとらえられていたことを話した。(旧暦)

次に、資料として「夏の季語一覽」(参考図書9の索引を印刷したもの)を配布した。児童は、「アイスクリーム」や「キャンプ」を見つけては喜び、「母の日」や「武者人形」に現在の季節のずれを感じていたのであった。全体として、季節や体験を取り上げた言葉は、「季語」にふくまれることに気づき、安心したようであった。

② 「季語」を入れて、俳句をつくってみよう。(二十五分)

次に、「季語一覽」から、一つを選び、俳句づくりに挑戦さ

せた。ここでは、自分の体験を思い出し、呼びかけた。(二十五分) その間、教師は机間指導をして、書きあぐねている児童の対応に当たった。一つ完成した児童には、別の季語で更に作るように指示した。

こうして完成した作品を以下にまとめてみる。

- 草むらで ほたるの光 ひかっている
- 浴衣きて 花火見ながら 笑みこぼす
- 夏休み とても楽しい 遊びあり
- 夜になり 夏のデザート すいか食う
- 屋根で見る 打ち上げ花火 きれいだな
- 梅雨時の あじさいの葉に かたつむり
- 夏の夜 ねようとすると せみの声
- 夏休み アイスクリーム 近づくと
- ひんやりの アイスで暑さ ふっとばせ
- 夏休み 思いでいっぱい つくろうよ
- 夏の夜 虫のメロデー 聞こえるよ
- 夏の夜 墓の所で きもだめし
- 夏の音 去年と違う せみの歌
- かき水 夏にはぜつたい 食べたいな
- 楽しみだ 早く来ないか 夏休み
- 無我夢中 夏休みのこと 考える
- 楽しみが いっぱい増える 夏休み
- 先祖様 おはかまいりで こんにちは
- 友達と せんぼう機の前 ならぶ肩

- かき氷 後から冷たさ ついてくる
 - せみが鳴く 暑い夏の日 水遊び
 - せみが出た 夏の名物 大合唱
 - 池の中 もひとつ空が あるようだ
 - 青に白 雨上がりに は 虹も出る
- 完成した俳句は、大きな短冊に書き、掲示した。お互いの作品を鑑賞しあうためである。

(五) 全校としての取り組み

本校では、「豊かな体験を、のびのびと自分の言葉で表現できる」表現形式として、三年前から全校で「俳句をつくる活動」に取り組んでいる。各学年でも、題材や機会をとらえて「俳句づくり」に取り組んだ。全校としては、①俳句づくりを週時間に位置付ける ②全校俳句集会の実施 ③俳句の掲示コーナーへの掲示など環境づくりに取り組んだ。

① 俳句づくりを週時間に位置付ける

本校では、ユニット十五分による教育課程を編成している。毎週水曜日と木曜日は、朝の学習としてユニットずつ計上しており、従来は、教科学習の定着のための時間として活用してきた。今年度から、月に一度ずつ「俳句づくりの時間」として全学年共通に取り組んでみた。季節を題材としたり、学年で行った体験学習（花植え、田植え等）や行事等の共通体験を題材としたり、担任が題材を工夫して取り組んでいる。一年生から六年生まで、指を折りながら、五・七・五のリズムに乗せて、

自分の思いを俳句として完成させている。完成した作品は、教室に掲示したり、後述する学年便り等で広く紹介している。五・七・五という形式は、一年生から六年生まで共通して取り組むことができ、この時間を楽しみにしている児童も多いようである。

② 全校俳句集会の実施

俳句づくりは、基本的に個人の活動である。①のように、共通の時間として俳句づくりを経験していても、児童の思いは、自分の作品にだけ向いていることも多い。そこで、全校朝会の時間を活用し、全校俳句集会を実施している。各学年の作品を紹介したり、具体的な一句を教師が鑑賞してみせたり、言葉の入れ替えを試みたりと、そのポイントは多岐にわたる。いわば、友達作品を共同で鑑賞する時間にもなっている。

③ お便りへの掲載

①の俳句づくりの時間で完成させた作品は、学校便りで紹介したり、担任が学年便りに掲載したりして、保護者へも伝えていく。保護者の関心も高く、親子で作品を作ったり、夏休みに、「俳句絵日記」をまとめてくる児童も出てくるなど、波及効果も出てきている。

④ 俳句の掲示コーナー

学校での俳句づくりについて、来校者へも伝えたいという思いから、各学年の教室や廊下にも掲示してみた。授業参観や来

校時に保護者や来客に見てもらふことは、児童にとつても意欲づけになるようである。また、「俳句ギャラリー」に写真と俳句を一緒に掲示しているのも、俳句づくりの学習環境として、有効に働いている。

四 おわりに

この三年間、実践に取り組んでみての手ごたえをまとめると以下のようになる。

○ 俳句づくりの活動は、題材や取り組みの手順を工夫すれば、小学校一年生から六年生まで全校で取り組める表現形式であり、児童の表現意欲や言語感覚を高めることにつながっている。

○ 学習のまとめや学年の共通体験を題材として、さまざまな時間を活用して俳句を作ることを通し、児童の対象を見つめる目や表現を工夫する力(言葉の選び方や表現技法等)が伸びてくること。

○ 高学年では、季節についての学習をしてから俳句づくりに取り組ませると、より季節を意識して取り組めるようだ。

○ 共通の季節で作った俳句の鑑賞をすることが、場面の切り取り方や言葉の選び方などについて学ぶ機会となっている。

○ 学年や全校で取り組む俳句づくりは、友達の間でのつけどころや言葉の選び方、組み立てなど、互いに学ぶことにもつながっている。

○ 題材や期間を決めたコンクールを計画することにより、

定期的な俳句をつくる習慣ができてくること。
また、課題としては、次の点があげられる。

○ 俳句づくりに全校で取り組むためにも、「四季の句会」等を年間計画に位置づける等、教育課程上の位置づけを明確にしていく。

○ 児童の作った俳句に一言添えられるよう指導者側の力量を高めていく。教師も共につくるなど、研修の機会を増やしていく。

以上、学校全体と各学年の俳句づくりの様子をまとめてみた。小学校における俳句づくりの可能性は、大きいと感じている。今後も、「俳句づくりのある学校」をめざして、実践を積み上げていくつもりである。

(注一) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 国語」東洋館出版社 二十四ページ

(注二) 平成二十三年度版 教育出版小学校教科書『ひろがる言葉』三年上 六十より六十五ページ 四年上 六十より六十五ページ

(注三) 第七十二回国語教育全国大会(日本国語教育学会主催)平成二十一年八月三日～四日 会場 日比谷公会堂 文京区立窪町小学校 筑波大学附属中学校(分科会提案資料による)

(注四) 西田拓郎『はいくえっせい』で「季節」と出会う」第七十四回国語教育全国大会(日本国語教育学会主催)

平成二十三年八月八日) シンポジウム資料による

(注五) 谷井紀夫「言葉を磨く、心を磨く―俳句指導を通して」

日本国語教育学会編「国語教育研究」四七三号 平成

二十三年九月 四十八より四十九ページ

(注六) 中島賢介「発達過程に応じた俳句創作指導法の研究」

『北陸学院短期大学紀要四十』平成二十年 三十三よ

り四十二ページ

参考図書一覧

(主に、児童向けの俳句づくりのための資料と考えられるもの)

- 1 櫻本 喜徳 こども俳句歳時記 ポプラ社 一九九一年
- 2 佐々木幸綱・谷岡亜紀 短歌を作ろう さえら書房 一九八九年
- 3 藤井 國彦 奥の細道を読もう さえら書房 一九九四年
- 4 さくらももこ ちびまる子ちゃんの俳句教室 集英社 二〇〇二年
- 5 小林 清之介 おぼえておきたい俳句一〇〇 あかね書房 一九九八年
- 6 岸田 衿子 どうぶつはいくあそび のら書店 一九九七年
- 7 ことばと遊ぶ会編 ことば遊び事典 あすなる書房 二〇〇七年
- 8 松尾 芭蕉 おくのほそ道 ほるぷ出版 二〇〇八年

9 荒尾 禎彦監修 四季のことは絵事典 日本の春夏秋冬に

親しよう! P H P 研究所 二〇〇九年

10 向山 洋一監修 一〇〇句おぼえて俳句名人 角川学芸出

版 二〇〇九年

11 伊藤章夫・大石好文 奥の細道 1 春を歩く 理論社

二〇〇六年

12 伊藤章夫・大石好文 奥の細道 2 夏を歩く 理論社

二〇〇六年

13 伊藤章夫・大石好文 奥の細道 3 秋を歩く 理論社

二〇〇六年

付記

恩師、有澤俊太郎先生の退官記念の原稿をまとめつつ、思いは二十年前の大学院時代に跳んでいます。有澤先生には、資料収集の方法から研究の視点の在り方まで、折にふれて丁寧にご指導頂きました。また、たくさんの国語研究者との出会いの場を作って頂いたことは、今の私の財産になっています。

有澤先生に衷心より感謝申し上げますとともに、益々のご隆盛を祈念しております。今回の機会を与えて頂いたことを通して、自分の実践や考えをまとめることができました。今後の精進を約束しつつ、結びといたします。

(山形県酒田市立広野小学校)